

感染症・予防接種レター (第 93 号)

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会

委員長 岡田 賢司 副委員長 多屋 馨子
津川 毅 並木由美江

久保田恵巳 城 青衣 菅原 美絵
東 健一 三沢あき子 渡邊 久美

障害者福祉施設における新型コロナワクチン接種の報告

障害福祉現場から小児保健関係者へ伝えたいこと

「する」「しない」の線引きが困難な現場から

新型コロナ感染症対策においては、マスク着用とワクチン接種が常に取り上げられ、さまざまな議論となってきたが、小児保健の現場ではこれが「する」「しない」で単純に考えられるものではないという点は自明である。小児に関わる各種の現場が科学的知見をもとに判断をし、取り組むことであり、そのひとつの事例として、私の関わっている障害者支援施設の実践を紹介したい。

この施設は生活介護のためのもので、強度行動障害（自傷行動、他害行動を含む）をもち、知的障害を伴う自閉症成人が利用者の3分の2を占める。肢体不自由者や視覚障害者も利用している。日常的に癲癇発作を繰り返す人もいる。加えて、触覚過敏の人、聴覚過敏の人もいる。いろいろな特性をもつ人たちが、一日をその人らしく穏やかに過ごせることが、まず基本である。

日常的な配慮として、まず、朝の会では、その日の流れをボードで絵や写真を示しながら確認する。帰りの会では翌日の予定を示す。個別に手元カードや必要に応じてデジタル時計を用意して、時間ごとに時計を見て確認し、カードをめくりながら活動していく。このような日常であれば、見通しができるので緊張もほとんどなく過ごせるが、通院や特に治療を伴う受診となると、数日前から不穏状態になり落ち着かない人が多い。

したがって、新型コロナウイルスワクチンの接種についても、保護者からは「日常と異なる場所である集団接種会場に入れない」「状況が理解できず暴れる危険もあり、受けさせたくても困難」と相談を受けた。私たち支援者の立場としても、利用者の安全を確保しな

がら安心して接種をという点で意見が一致し、事業所内での接種を検討した次第である。

まず、事業所内での接種を日常的に担っている嘱託医が実施することを条件に、障害福祉課に許可を得る。利用者は市外からも通っているため、それぞれの担当課での許可が必要となった。利用者にあわせて支援者も接種対象とする。保護者に接種の希望を書面で回答してもらい、全員の接種希望を確認した。利用者と支援者の多くが一斉に接種するため、副反応への対応ができ、翌日の業務に支障をきたさない金曜日の午前中を接種日とした。

接種前日までにやったこと

- ・利用者へ：毎月実施している内科診察と同様に、嘱託医が診察の後、新型コロナワクチンを接種する旨、医師と看護師の写真を示しながら伝える。
- ・利き腕の確認をし、利き腕への接種を避ける。麻痺側の腕は避ける。
- ・保護者へ：接種時は事業所の看護師と支援者が介助することを伝え、接種予定の10分前には事業所駐車場まで待機してもらう。接種後15分で異常がなければ車まで支援員が誘導すると伝える。
- ・接種の順序と介助者を決める。利用者全員が終わってから支援者が接種する流れだが、緊張や不安が強いと思われる場合は、支援者の接種の様子を見せてから本人の接種をする。
- ・当日は肩が出せる洋服を着用してくるよう、本人および保護者に伝える。

当日の流れ

- ・接種に関わる書類の確認（ダブルチェック）。検温は事業所で実施し記入。

- ・医師，病院看護師と事業所看護師の打ち合わせ。書類確認。朝の健康観察報告。
- ・会場設定と流れの確認
内科診察→予防接種→観察時間のシールを貼る→部屋で15分間観察→降所
- ・支援者は本人に声をかけながら肩と肘を保持し，接種の際に腕が動かないよう支える。
- ・一人ひとりに，医師は「ここにさわるよ」「ちょっとチクッとするよ」，看護師は「いっしょに1, 2, 3つてかぞえるよ」「ようい1・2・3」「おわりです。がんばりましたね」と言葉をかける。
- ・観察時間がわかるよう，デジタル時計をあらかじめ15分進めておき，接種終了時に15分後の時間をマジックで書きこんだシールを『頑張ったシール』で」と伝えて，胸，背中，腕など本人の希望する場所に貼り，接種後の観察を支援者に引き継ぐ。

個別対応の実際

- *緊張する人：待ち時間を短くして，2番，3番目くらいに接種する。
 - *不安な人：医師の前に利用者と支援者が対面で座り，支援者が先に接種する様子を見せてから接種を促す（正面で介助）。
 - *触覚過敏の人：腕を出す時，自分で服を巻き上げてもらう。少し手伝うことを伝えてから衣服の調整をする。介助の場所と，注射するために腕を触ることを伝えて，本人が納得したら接種する（本人は返事ができないため表情や体の動きで判断）。
 - *聴覚過敏の人：待ち時間は静かな別の場所で待つ。声掛けは最小限で必要なことを伝える。
接種後の観察時間は，他の人と一緒の場合はカーテンで仕切るか静養室を使用する。
 - *歩行が困難な人：車いすで移動。当日の気分で歩行したくない人も車いす可とする。
 - *視覚障害の人：言葉かけを丁寧に行う。「前に〇〇先生がいます。右側に看護師がいます。左側に担当の〇〇がいます。初めに喉をみて胸の音を聞きます。次は…」。
- 毎月の診察と会場設定は同じであり，動線は理解しているため移動への不安はない。横に並んで移動支援をし，接種時も触れていることで安心できるよう配慮する。
- こうした方法で，予定していた人全員が接種でき，接種後の副反応も局所症状の他はほぼ軽症で3回の追

加接種まで完了できた。今後8月頃には4回目の接種が見込まれている。

ワクチン接種の体験経験を通して改めて感じたこと

まずひとつ感じたことは，日常の丁寧な関わりがあつてこそ，非日常的な事柄（今回の予防接種）が可能であるという点である。この事業所では，インフルエンザワクチン接種も数年来実施してきた。以前は，接種のために家族が病院に連れていくこと自体が難しく，接種していなかったが，「インフルエンザにかかったら治療も入院もさらに困難」と保護者から聞いたことをきっかけに，日常の環境を変えることなく，安心して接種できる事業所内接種に取り組んできた。重度の障害があっても，その特性を理解し，その日の身体および精神の健康状態を理解した丁寧な関わりができる支援者がいることで困難さは軽減される。たとえ障害がなくても，また，大人でも子どもでも個別にどんな配慮が必要なのか，できるのか，考えることが大切であろう。

もうひとつ感じたことは，嘱託医や病院看護師がそれぞれの特性を理解し，個別に対応したことで接種が可能だったという点である。毎月の内科診察でも，本人の気分が向かない時は順番を変えたり，声掛けをシンプルに静かに語りかけたり，何度も診察してほしいと座り込む人には「はい，おまけ」と再度聴診器をあてたり，動作が緩慢でも自分のペースで診察の椅子に座れたら褒めたり。また，とっさに出た手につかまれても「離しなさい」と命令口調では言わず，「おっと，つかまっちゃった」「わかりました，離してください」と穏やかに対応する。変化する利用者の体調や気分を理解したうえでの対応の積み重ねが，月に一度の診察であっても日常の一つとして利用者が見通しを持ち，待つできごとになっていたのだと感じた。

今回の新型コロナウイルスワクチン接種は，（平凡な言い方になってしまうが）日常の丁寧な関わり大切さ，それがあつてこそ，日常とは異なり困難と思われる事へも（職員も利用者も）柔軟に対応できることを再度学ぶ機会となった。また，利用者にとっても接種後に褒められた経験が自己肯定感につながっていると表情からうかがえた。保護者からは「無理かと思っていただけに本当に接種できたんですね」という安堵の声が聞こえた。

子どもの 10 年後, 20 年後を具体的に考える大切さ

最後に, 子どもという側面から考えると, 障害がなくとも乳幼児期から学齢期にかけては予防接種の種類や回数も多く, 痛みを伴うつらい経験である。子どもの恐怖や不安を理解して接すること, 接種後には頑張れたことを褒めてあげることが必要である。それだけでなく, 予防接種は「自分の健康を自分で守るためにできること」はどんな事があるのか, 年齢や発達過程に沿った健康教育のきっかけともなる。

障害者支援施設で生活している人たちは, 成人してからでも支援によってできることが緩やかに増えていく。しかし, 「同じ支援が乳幼児期や学齢期にあったら, この人たちはもっと生活しやすかったかもしれない」と思うこともある。自立して歩行できる, 自分で食具を使って食事はできる。でも手を洗い拭くことが

できない, 鼻をかめない, 靴下や靴が履けない, 衣服の着脱ができない等。乳幼児の発達ではおおむね 3 歳頃にはできる姿であり, 児童発達支援の場でも就学までに目指す姿として取り組んでいるが, 成人してから支援ではその何倍もの時間を要すると痛感することが多い。改めて乳幼児期・学童期の関わりは重要であり, 多職種の専門職を会員とする小児保健協会の果たす役割は大きいと感じる。

子どもへの新型コロナウイルス予防接種がまだ行きわたらない中, この 2 年以上大人よりも厳しい生活を強いられている子どもたちのために, 専門家の方々がそれぞれの場で子ども一人ひとりの 10 年後, 20 年後を見据えて, 今求められる健康支援を丁寧に実践していくことの大切さを思うばかりである。

(文責: 並木由美江)